

「人生で最も影響を受けた本は？」と尋ねられ、ノーベル文学賞作家バーナード・ショーは「銀行の預金通帳だよ」と答えたらしい。人間は思想でも動くが、情欲や生存本能があり、多くは損得勘定で動く。武士がいくら忠義といっても、本音の行動は「おかね」に左右される。それで、私は『武士の家計簿』という本を書き、サムライの実生活から、その思想と行動を読み解いてみたことがある。

私は幼時から、お金をめぐるって、他者がどんな行動をとるのかを見るのが好きだった。小学生の時、犬にお金がわかるか、実験してみた。飼犬二匹の前に一万円札と肉を置いた。さあ、どっちに犬は行くのか。百発百中、犬は肉に走った。お金にはいかない。犬はお金がわからないと確信した。その時分、私は百点神社なるものを庭に作っていた。「勉強せず神頼みにあてた場合」と、「勉強した場合」で、どちらがテストで点を取れるかの実験もした。もちろん、勉強をした時のほうがテストはよくできた。犬には神もわからないらしく、百点神社を壊してしまった。結局、現生人類だけが、神・国・金に強く執着し、そのなかで時には多くの生命を奪う。変な実験をやるうち、そういうかなりマズイ生き物に自分は生まれてし

お金と数への恋着を超えて

磯田道史



絵・江口修平

まった。子どもの私は、それに気づいてしまった。

古代↓中世↓近代と時代の流れで、人類は神↓国↓金と恋着の相手を変えてきた。さらにお金は数だ。数は比較と順位づけの道具になる。お金や偏差値など数に、生身の人間が価値判断をゆだねがちな世の中になってしまった。塾通いの子は、テストの点数がよいと、ゲームが買ってもらえ、得点が数字で出ているゲームで遊ぶ。高い偏差値ランクの大学に入れると、社会的威信度スコアと給与の多い職に就ける。それが「幸せ」に近いと信じるようなホモサピエンスの不思議な行動が、この国でみられる。

現代では、人工知能がネットにつながって大量のデータを学び、さらには量子コンピュータがこの演算処理に加わるうとしていく。塾とゲームで育った子どもが役所や大企業に入ると、親にされたように数字で人を評価・管理しようとする傾向が強まる。数字は文化ではない。うすっぺらい話になる。いまは現代だ。金と数への恋着はしばらく続くだろうが、人工知能の時代になると、人類のなかには、この恋人に飽き始め、距離をおこうとする個体もきつと増えてくる。経済指標の彼方にある本質も見つめてほしい。

いそだ・みちふみ●1970年岡山市生まれ。慶應義塾大学大学院卒。博士（史学）。茨城大学助教授、静岡文化芸術大学教授などを経て、現在、国際日本文化研究センター教授。著書に『武士の家計簿』（新潮新書、新潮ドキュメント賞受賞、2010年映画化）。NHKのBS歴史番組「英雄たちの選択」やBS日テレ「磯田道史の歴史をゆく」にも出演。

